

奈良市埋蔵文化財発掘調査の歩み

II

—速報展示リーフレット集—

(平成15~17年度)

2007

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財発掘調査の歩み

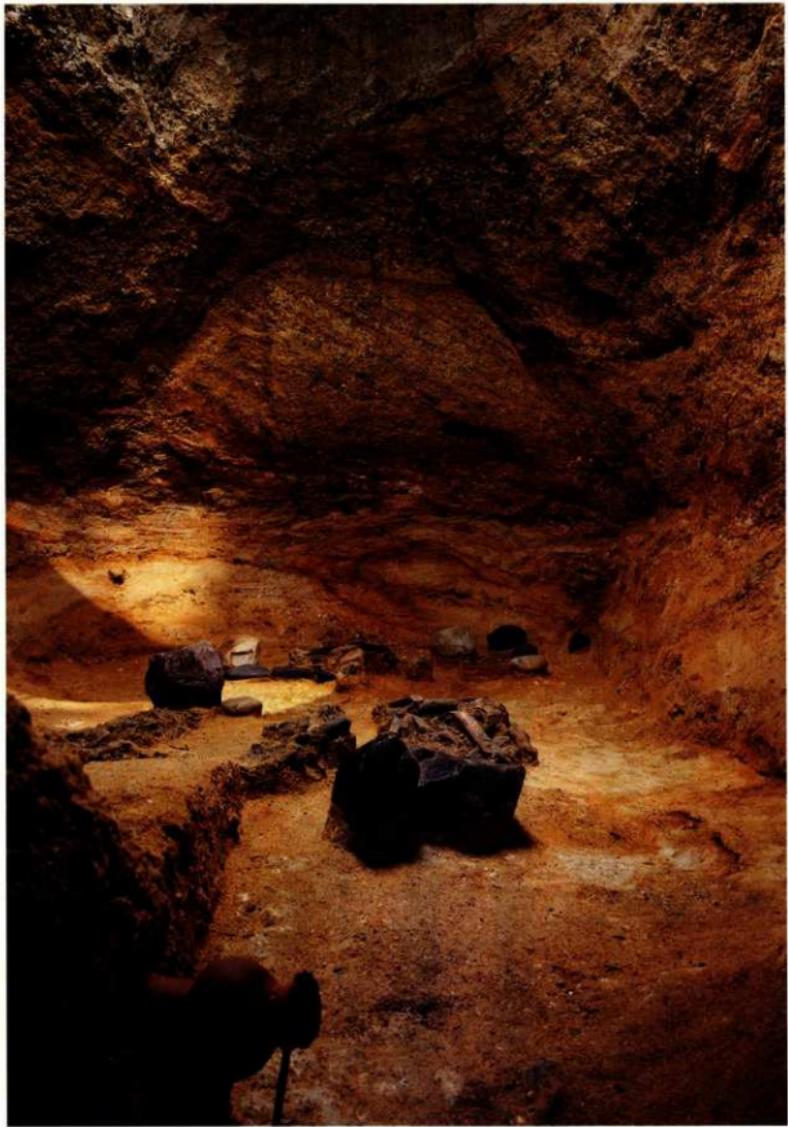
II

—速報展示リーフレット集—

(平成15~17年度)

2007

奈良市教育委員会



口絵1 玄室内全景（独立行政法人奈良文化財研究所撮影）



口絵2 大型人形

平城京跡出土 14頁



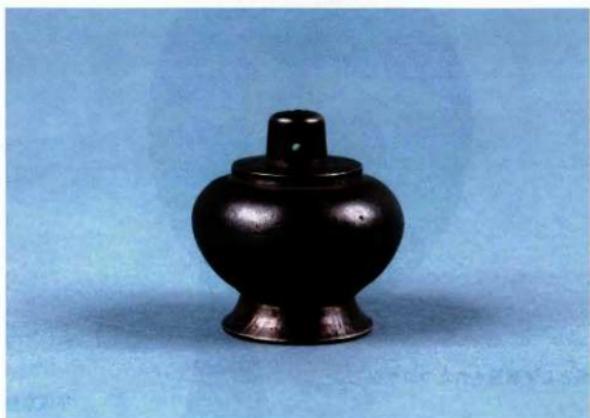
図絵3 容器として利用されたココヤシ

平城京跡出土 8頁



図絵4 漆紙文書（具注曆）

平城京跡出土 16頁



口絵 5 市指定文化財 壺形分銅



口絵 6 篦形分銅



口絵 7 釣鐘形分銅

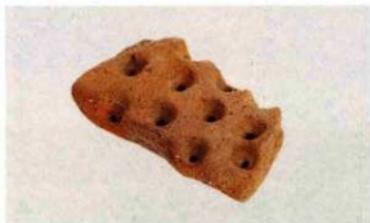


口絵 8 「分銅形」土製品



口絵9 六稜鏡

平城京跡出土 24頁



口絵10 ガラス小玉の鉄型

大安寺旧境内出土 2頁



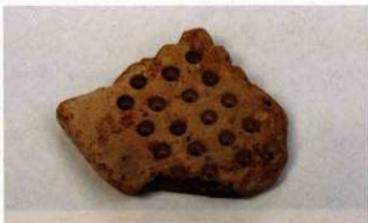
口絵11 ガラス小玉の鉄型

大安寺旧境内出土 2頁



口絵12 ガラス小玉の鉄型

平城京跡出土 2頁



口絵13 ガラス小玉の鉄型

平城京跡出土 2頁



図14 前方部葺石検出状況

(仮称) 法華寺塙内古墳 18頁



図15 基底部が埋まった状態で残存していた埴輪

六条野々宮古墳 6頁



口絵16 東堀河

平城京跡 12頁



口絵17 食堂院跡推定地で確認された埋甃造構

西大寺旧境内 10頁



口絵18 檜製の角柱

(仮称) 西大寺東遺跡／西隆寺跡 20頁



口絵19 鶴尾の頭部の破片

西大寺旧境内 22頁

例　　言

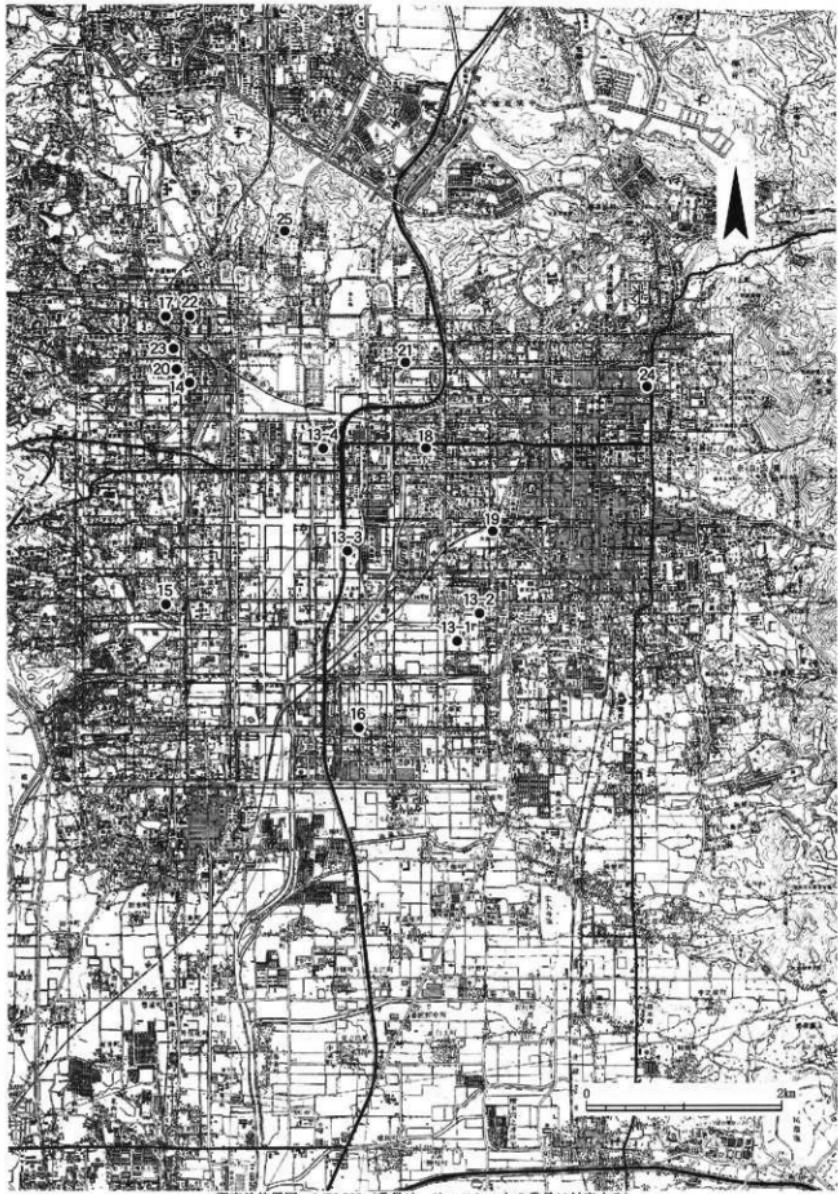
- 1 本書は、平成15年度から平成17年度にかけて、奈良市埋蔵文化財調査センターで実施した、速報展示の際に一般市民の方々を対象に作成したリーフレットを集成したものである。
- 2 展示及びリーフレットの作製は、森下浩行が担当した。展示の内容、及びリーフレットの内容については、下表の通りである。
- 3 各リーフレットは表裏2頁で構成したが、本書に集成するにあたり、見開き2頁として再構成した。左頁には主に発掘調査の概要を、右頁には特記事項について記載した。
- 4 本書を作成するにあたり、展示した遺物、パネルの写真の一部を巻頭に掲載した。
- 5 リーフレットの編集は森下浩行が担当し、本書の編集は久保邦江が担当した。

年　度	回　数 期	遺跡名(所在地)	No.	リーフレット		執筆者
				題　名	尚	
平成15年度 (2003)	第8回 7.7~8.29	大安寺旧境内(大安寺一丁目、東九条町)	13	大安寺旧境内出土のガラス小玉の説明	表裏	松浦五輪美 宮崎　止盛 池田　裕英
		平城京跡　右京二条二坊十五坪(横振町)	14	平城家跡出土の「分銅」形土製品	表裏	松浦五輪美
		六条野々宮古墳・平城京跡(六条一丁目)	15	初めて発見された西ノ京丘陵の古墳	表裏	久保　邦江
		平城京跡　左京八条二坊五坪(谷町)	16	古代の井戸からココヤシの実	表裏	三好　美穂
平成16年度 (2004)	第10回 7.12~8.31	西大寺旧境内(西大寺本町)	17	西大寺旧境内で発見された埋甕遺物	表裏	武田　和哉
		平城京東羅河跡(大宮町四丁目)	18	東羅河—古代の人工河川—	表裏	三好　美穂
		平城京跡　左京五条四坊(大森町)	19	平城京の条坊道路—交差点と街—	表裏	立石　堅志
		平城京跡　右京二条三坊一坪(西大寺南町)	20	井戸から出土した平城京の署	表裏	山前　智敬
平成17年度 (2005)	第12回 7.11~8.31	(仮称)法華寺址内古墳・平城水跡 (法華寺町)	21	埋もれていた佐紀の大型古墳	表裏	池田　裕英
		(仮称)西大寺東道路・西應寺跡 (西大寺東町一丁目)	22	古墳時代?の大型張立柱建物と集落	表裏	大森　淳司 森下　浩行
	第13回 3.6~3.31	西大寺旧境内(西大寺南町)	23	西大寺寺地から出土した御尾	表裏	宮崎　正裕
		平城京跡　左京二条七坊十五坪・ 奈良町遺跡(今小路町)	24	完存していた平安時代の鏡　六面鏡	表裏	中島　和彦
		歌姫赤井谷横穴墓群(歌姫町)	25	古墳時代末期の横穴から改葬人骨	表裏	池田　裕英

目 次

- 口絵1 玄室内全景
- 口絵2 大型人形
- 口絵3 容器として利用されたココヤシ
- 口絵4 漆紙文書（具注曆）
- 口絵5 市指定文化財 壺形分銅
- 口絵6 笠形分銅
- 口絵7 鈎鑓形分銅
- 口絵8 「分銅形」土製品
- 口絵9 六稜鏡
- 口絵10 ガラス小玉の鋳型
- 口絵11 ガラス小玉の鋳型
- 口絵12 ガラス小玉の鋳型
- 口絵13 ガラス小玉の鋳型
- 口絵14 前方部葺石検出状況
- 口絵15 基底部が埋まつた状態で残存していた埴輪
- 口絵16 東堀河
- 口絵17 食堂院跡推定地で確認された埋甕遺構
- 口絵18 檜製の角柱
- 口絵19 鳥尾の頭部の破片

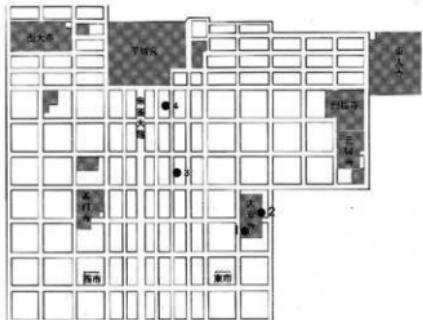
No. 13	大安寺旧境内出土のガラス小玉の鋳型	2
No. 14	平城京跡出土の「分銅」形土製品	4
No. 15	初めて発見された西ノ京丘陵の古墳	6
No. 16	古代の井戸からココヤシの実	8
No. 17	西大寺旧境内で発見された埋甕遺構	10
No. 18	東堀河—古代の人工河川—	12
No. 19	平城京の条坊道路—交差点と橋—	14
No. 20	井戸から出土した平城京の曆	16
No. 21	埋もれていた佐紀の大型古墳	18
No. 22	古墳時代？の大型掘立柱建物と集落	20
No. 23	西大寺寺地から出土した鳥尾	22
No. 24	完存していた！平安時代の鏡 六稜鏡	24
No. 25	古墳時代末期の横穴墓から改葬人骨	26



調査位置図 1/50,000 (番号は、リーフレットの番号に対応する)

大安寺旧境内出土のガラス小玉の鋳型

史跡大安寺旧境内 奈良市大安寺一丁目、東九条町



平城京内でのガラス小玉鋳型の出土地

平成12・13年度に、史跡大安寺旧境内で行った2箇所の発掘調査でガラス小玉の鋳型が1点ずつ出土しました。

塔院跡（西塔跡）（上図-1）

現在の大安寺の南にある、八幡神社参道のさらに南に広がる一帯が塔院跡です。ここに残る東西二つの土壇が塔跡で、このうち西塔跡の周辺で調査を実施しました。塔跡周辺では特に目立った遺構は見つからず、塔の西側で、塔に先行する条坊区画の飼溝と思われる溝と、敷地の西端から外へ向かって下っていく瓦の堆積層が確認されました。

ガラス小玉の鋳型は、塔跡の土壤の北で見つかって、東西約1.5m、南北1.0m以上、深さ0.5m以上と推定される土坑から出土しました。

殿院跡推定地（左図-2）

殿院跡は、大安寺の北東に所在する大安寺幼稚園の一帯、すなわち大安寺旧境内の東端に推定されています。これまで殿院跡では、礎石建物の根石や基礎、築組の井戸などを確認しています。今回、同幼稚園での発掘調査で、奈良時代や平安時代の掘立柱建物・堀、溝、井戸、土坑を検出しました。

見つかったガラス小玉の鋳型は断片で、南北1.0m、東西5.8m以上、深さ0.2~0.4mの土坑から、奈良時代の瓦や平安時代の土器とともに出土しました。この鋳型は、平安時代以降にこの土坑に廃棄されたようです。

平城京では、大安寺旧境内出土品をあわせてガラス小玉の鋳型が4箇所から出土しています。それは下表の通りです。

また、ガラス小玉製作の際に鋳型とともに使用する坩堝は、この4箇所では出土していませんが、平城京内のいくつかの発掘調査では、ガラス滓（くず）の付着した坩堝が出土しており、ガラス（玉）の生産が行われていた場所がいくつかあったものと思われます。

平城京内で出土したガラス小玉鋳型

番号	遺跡名	出土地	製品の直径 (mm)	芯棒の痕跡	焼成状態
1	史跡大安寺旧境内 (西塔跡)	奈良市東九条町	4.5 ~ 5.0	あり	土師質
2	史跡大安寺旧境内 (殿院跡推定地)	奈良市大安寺一丁目	3.5 ~ 4.0	あり	土師質
3	平城京跡 (左京五条二坊三坪)	奈良市大安寺町	2.0 ~ 3.0	あり	須恵質(瓦質)
4	平城京跡 (左京三条一坊十一坪)	奈良市三条大路二丁目	3.0	あり	土師質

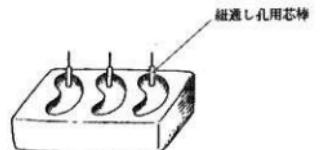
ガラス小玉を作る 奈良時代にガラス小玉をどのように作ったのかは、次の2つの資料が手がかりになります。1つは正倉院文書にある『造仏所作物帳』です。この文書には、大平6(734)年の興福寺の西金堂を造営する際に、どういう材料を、どれくらい使って、何を作ったかが詳細に記されていて、その中にガラス小玉に関する記述があります。いま1つは、奈良県明日香村でみつかった飛鳥島遺跡です。この遺跡では、ガラスの生産に関わる遺物も出土し、ここでガラスが作られていたと考えられています。これらの資料を手がかりにすると、ガラス小玉は以下のようにして作られたのではないかと考えられます。

(1) 原材料の入手 ガラスの原材料は、^{ほうとう}方鉛鉱、輝安鉱、石英といった鉱物です。奈良時代には国内で採った鉱物が使われていたようです。

(2) 塗堀・鋳型の製作 塗堀、鋳型はいずれも粘土を焼いて作ったものです。塗堀は砲弾のような形をしており、きめの粗い粘土の中に石英の小粒を混ぜて作られています。この塗堀には、蓋もあります。鋳型は厚さ1cm程の粘土の板の片側の面に直径3~5mmの半円形の小さな凹みをたくさん並べたものです。凹みの底には、芯棒を立てるための、直径が1mmにも満たないような極く小さい穴があけられています。

(3) ガラス板を作る 先の鉱物を調合し、塗堀に入れ、炉の中で加熱します。出上したガラス小玉には、いろいろな色がありますが、ガラスに色を着けるのは、主に銅と鉄が使われたようです。銅は酸素が不足した状態では赤褐色に、酸化した状態では緑に発色し、鉄分を含んだ赤土を加えると、黄色や褐色のガラスを作ることができました。このようにして、できたガラスを鋳型に流し込み、ガラスの板が作られました。

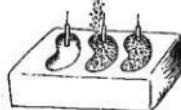
(4) ガラス小玉を作る ガラスの板を細かく碎いて、そのガラス片を鋳型の凹みの中に入れ、芯棒をたて、下から熱します。熱せられたガラス片は、表面張力で丸くなります。芯棒には、針金や植物の茎が使われていたようです。そして、ゆっくり冷やされ、できたガラス小玉を鋳型から取り出し、砥石で磨いて仕上げたとみられます。



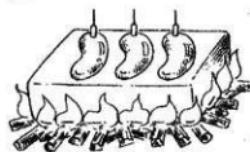
1. 鋳型 粘土に勾玉形の凹みをあけ、縫通し孔となる芯棒を立てる



2. 錆込み ガラス浮(屑)を盛り上がるようく詰め込む

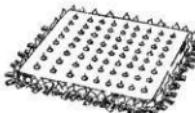


ガラス勾玉



3. 加熱 鋳型ごと熱してガラスを溶かす

ガラス小玉

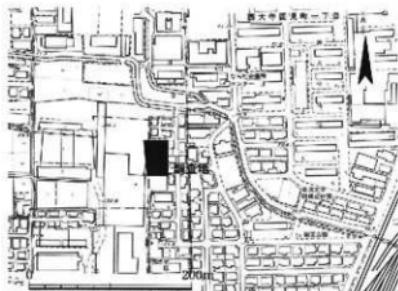


ガラス勾玉・小玉の作り方

(2001太田区立郷土博物館編「ものづくりの考古学」)

平城京跡出土の「分銅」形土製品

平城京跡（右京二条二坊十五坪） 奈良市横領町



調査地位置図 (1/6,000)



「分銅」形土製品 1/2

平成13年度に行なった、近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内の調査において、珍しい「分銅」形土製品が出土しました。

調査地は、平城京の条坊復元では、右京二条二坊十五坪の南半西端にあたり、平成5年度の奈良市の調査成果によれば、西二坊大路の一部が調査区内を通ると推定されていました。

調査の概要 検出した主な遺構には、**掘立柱建物跡**、**掘立柱廻跡**、**井戸跡**、**溝**、**土坑**、**池跡**があります。

掘立柱建物跡は7棟分確認しました。柱穴が小さく、建物の主軸が四方位に対して振れているものが目立ち、鎌倉時代以降のものが多いようです。奈良時代の可能性が高い1棟は、南北4間(9.6m)、東西2間(3.6m)の南北に長い建物です。

井戸跡は3つ見つかりました。2つは井戸枠がほとんど残っていませんでしたが、1つは約4.5m四方で深さ約3mの穴の中に、約0.6m四方に縦板を組んだ方形の井戸枠が残っていました。そしてこの枠を囲むように外側にも縦板が廻っており、

この井戸が作り替えられたことがわかりました。井戸の中からは奈良時代後半の土器や須恵器が出土しました。

溝はいくつか検出しましたが、そのうち発掘区の中央を南北に貫く溝は幅約1m、深さ0.3m前後で、平安時代末頃の遺物が出土しました。建物や井戸はすべてこの溝より東側で見つかっており、この頃にこの溝によって宅地が改めて区画しなおされたようです。このほか発掘区の西壁際で、幅9m以上、深さ0.3m以上の溝を検出ましたが、以前の調査から考えるとこの溝が西二坊大路の東側溝に当たる可能性があります。

また、発掘区の北西部は地表から3m位まで粘土と砂が溜まっており、その中に江戸時代の陶磁器などが含まれていました。その緑は杭を打ち、竹を渡して護岸が施されており、当時このあたりが溜池のようになっていたと推測されます。

「分銅」形土製品 「分銅」形土製品が出土したのは、奈良時代と思われる掘立柱建物に重複して掘られていた、直径約1m、深さ0.3mほどの小さな土坑です。何かを抜き取った跡を埋めたような状態がうかがえましたが、何のために掘られたもののかははっきりしません。いっしょに出土した遺物からみると、土坑が埋められたのは平安時代に入ってからと思われます。

出土した「分銅」形土製品は、土を焼いて作ったもので、高さ4cm、底面の直径が3cmの釣鐘形をしています。表面は磨かれ、焼き上がりによって銀灰色となっています。

この「分銅」形土製品の重さは36.43gありますが、焼き物であるため、ものの重さを量る「分銅」として、正確に作るのは無理であったと思われます。また、金属と違って損傷しやすので、実際の秤として使用するには適していないと考えられます。したがってこの製品は、何かに付けた錘か飾りのような目的で作られたと考えるのがよいと思われます。

古代の分銅（錘）について 古代においては、もの重さを量る錘は、天秤ばかり用と目盛りのついた錘ばかり用がありました。このうち、天秤ばかり用の基準となる錘を分銅と言います。材質は銅や鉄製など金属製のものがほとんどですが、古代の中国では石製のものや、時代が下って明の時代には焼き物の分銅もあったようです。形も時代によって変化しているようで、銀行を示す現在の地図記号は、近世以降によく使われていた分銅の形を表しています。近世以前には壺形・笠形・半球形・釣鐘形など色々な形がありました。

奈良時代の重さの基準は、大宝令（奈良時代の法律）で規定しており、斤・両・分・銖という単位を使用しています。1斤（約672g）は16両、1両（約42g）は4分または24銖にあたります。

錘は、今までに国内で20数点出土しており、奈良市内では、3点が出土しています。これらのうち、上の基準に合致するものは、確実に分銅と思われます。

1は、井戸から奈良時代後半の土器と一緒に出土し、確実に奈良時代のものといえる資料です。

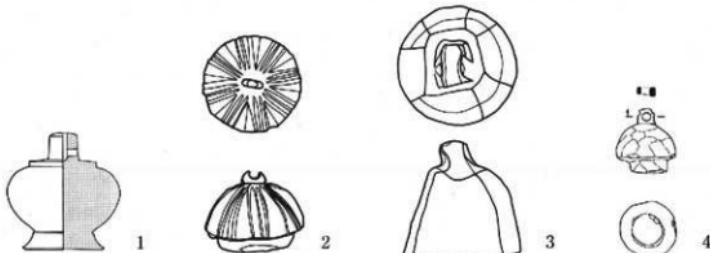
銅製で、重さは一斤の半分の8両あります。形は金属器の蓋付きの壺を模倣しています。鋳造したものをろくろによって形を整えて極めて精緻に仕上げています。（平成6年 奈良市指定文化財）

2は、笠形のものです。銅製で重さは1の半分の4両あります。笠部は放射状に模様を線刻しています。類似品が出土国府跡から出土しています。

3は、釣鐘形で鉄製のものです。表面が銷びて剥落しているため、本来の重さはわかりません。

1・2とは材質も異なり、造りがあらく、形もいびつです。使われる場所が違うのか、用途が違うのかはわかりません。なお、2・3は奈良時代以前のもので、正確な時期は不明です。

今回の調査で出土した土器品は、3の釣鐘形の錘に似ています。平安時代以降のものであることから、この形のものは他よりも時代が新しい可能性があります。重さが36.43gで、当時の重さの単位には一致しないので錘であるかもしれません。しかし、素焼きであるため、破損しやすく、重さが変わることがあります。重さを量るのには適さないのでないでしょうか。



分銅（錘） 1/2 4は報告書（大和郡山市教育委員会1990）より抜粋

奈良県内出土分銅（錘）一覧表

番号	遺跡名	出土地	時代	形態	材質	重さ(g)	大きさ(cm)	備考
1	平城京跡 (左京九条一坊二坪)	奈良市 西九条町	奈良	壺形	銅	329.1	(平面径) 4.6 (高さ) 4.75	8両
2	平城京跡 (左京三条四坊九坪)	奈良市 芝辻町	奈良?	笠形	銅	174.26	(平面径) 4.0 (高さ) 3.4	4両
3	平城京跡 (左京三条二坊六坪)	奈良市 八条町	奈良	釣鐘形	鉄	*304.86	(平面径) 4.9 (高さ) 4.9	*錘のため 不正確
4	平城京跡 (右京八条一坊十坪)	大和郡山市 八条町	奈良	笠形	銅	40.0404	(平面径) 1.32 (高さ) 2.6	1両
5	藤原京跡 (右京二条三坊)	橿原市 醍醐町	飛鳥	笠形	銅	26.762	(底部径) 1.5 (高さ) 2.3	

初めて発見された西ノ京丘陵の古墳

六条野々宮古墳 奈良市六条一丁目



近鉄西ノ京駅から少し西へ歩むと、西ノ京丘陵の支脈の緩斜面がはじまります。その斜面の途中にある住宅地の一画で、今日まで知られていなかつた古墳が発見されました。この古墳を所在地の地名から六条野々宮古墳と呼ぶことにします。

調査地付近は、近年、宅地化が急速に進み、造成工事などにより丘陵本米の地形を留めていない所が随所に見られます。六条野々宮古墳のある所も例外ではなく、古墳南辺部は大きく削平され宅地化しており、東側や西側には既に民家が建っています。幸い古墳の2/3程は宅地裏山の雑木林として残っていたので、今回の発見につながりました。

調査の概要 古墳が所在する場所は、平城京の条坊復元では、右京六条三坊六坪の坪内に位置します。このため発掘調査は、丘陵上に位置する六坪内の利用状況を把握することを当初の目的としていましたが、古墳が遺存していることがわかつたため、形状・規模等の古墳の遺存状態を把握することも調査課題に加え、2度（平成14年度平城京第489次調査・同15年度同第492次調査）にわたって実施しました。

残念ながら、既に墳丘の築成土や埋葬施設は削平され残っていませんでしたが、円筒埴輪の据付け穴2基と周溝の一部を発見しました。

第489次調査で検出した円筒埴輪の据付け穴は、平面が円形で径0.4m、深さ0.2mを測るもの（A）と、平面が梢円形で長径0.4m、短径0.3m、深さ0.2mのもの（B）がありました。A・Bいずれも穴内には円筒埴輪A・Bの基底部が残っていました。

円筒埴輪Aの大きさは、直径約26cm、残存高17cm程度で、最下段の突帯が一条残っていました。器表面には、横方向のハケメ痕跡や焼成時についた黒斑がみられます。

円筒埴輪Bは、長径23cm、短径20cmで、やや梢円形ぎみになっており、A同様、最下段の突帯が一条だけ残存していました。器表面は摩耗しているため、ハケメなどの調整痕は不明ですが、黒斑はみとめられました。

これらの円筒埴輪は、形態的な特徴や調整手法等の型式的特徴からみて、5世紀前半頃に作製されたものと考えられます。

このほかに、径0.3m、深さ0.1m程度の小穴数基と奈良時代の柱穴及び土坑を1基検出しています。

第492次調査では、発掘区の大半が現代の擾乱により遺構が残っていませんでしたが、北端で南北幅0.9m以上、東西の長さ0.6m以上の溝を検出することができました。深さは、検出面から0.4m程度あります。溝の底部には、自然堆積土と見られる褐色系の砂や暗褐色系の土が堆積しており、同層からは円筒埴輪片の他、奈良時代の須恵器の破片なども数点出土しています。

さらに、この土層の直上の堆積土には、室町時代の土器片が含まれており、堆積状態からも室町時代以降になって人為的に埋められていることがわかりました。土層の状態からみて、古墳の周溝は、少なくとも奈良時代までは壊されずに存在していたことが理解できました。

ただ、墳丘の築成土が削平された後に、奈良時代の柱穴や土坑が掘られていることから、墳丘部分は奈良時代以前に壊されていたことがわかります。

古墳の形と規模 墳丘の築成土や古墳の南辺部が削平されて残存していないため、推測することはかなり難しいのですが、埴輪据付け穴と周溝の位置関係から推測すると以下のように考えられます。

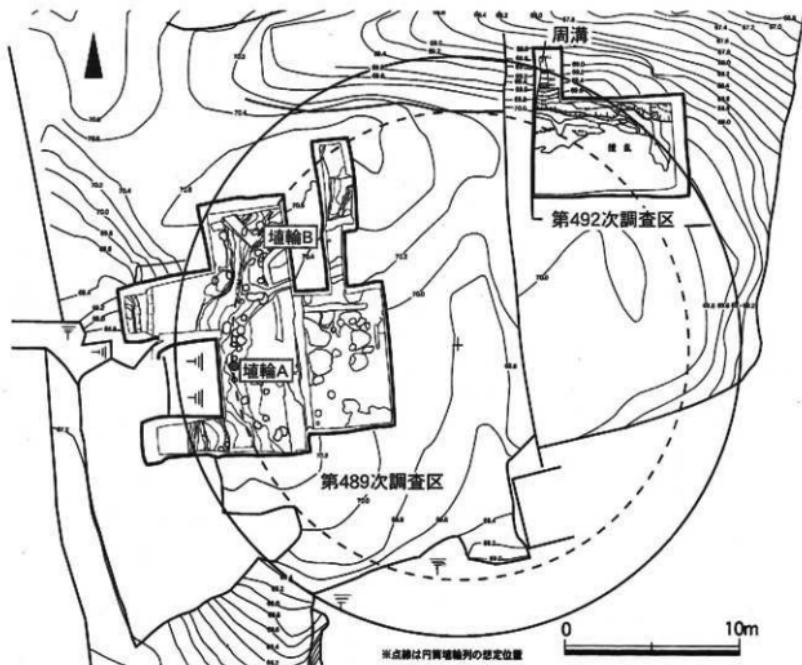
①周溝は、その一部を北側でしか確認していませんが、地形からは少なくとも東側及び西側にかけてはめぐっていた可能性が高い。

②第489次調査地では、埴輪据付け穴以外にも小穴を幾つか検出しています。小穴内では、埴輪や据付け痕跡などは確認できませんでしたが、穴の大きさは円筒埴輪本体の径に近似しているものが多くあります。後世に埴輪が抜き取られた結果、単なる小穴となって遺存していたものと推測できます。A・Bの据付け穴とこれら的小穴は、一連となって弧を描くような状況で分布していること

から、埴輪は古墳の裾に沿って円形に樹立されていたことがうかがえます。

以上のことを考慮し、古墳の形状を推測すると、六条野々宮古墳は、円墳、あるいは前方後円墳（今回検出した部分が後円部）の可能性が考えられます。ここでは、円墳と仮定した場合の復元を試みました。概ね径30m前後の円墳となり、奈良市内で発見されている円墳の中でも、かなり大規模なものになります。

立地条件もよく、丘陵の突端に位置しており、東は柏木町付近からJR奈良駅方面、南東の方向は大和郡山市域の一部を見渡せる展望の良い所でもあります。このようなことも含めて考えると、六条野々宮古墳の被葬者は、この地域を統括していた在地の有力者であったことを想起させられるのです。



墳丘復元図

古代の井戸からココヤシの実

平城京跡（左京八条二坊五坪） 奈良市杏町



調査地位図 1/20,000

平成14年度に、奈良市教育委員会が奈良市杏町内で実施した発掘調査で、ココヤシの実を加工して作られた容器が出土しました。

調査地は、^元平城京の条坊復原では左京八条二坊五坪の南東隅付近に当たり、周辺では過去の調査で、古代の建物の柱穴や、中世の土坑・溝、時期不明の井戸などの遺構が見つかっています。

今回は318m²の発掘区を設定して調査を行った

ところ、古代の井戸1基、掘立柱列3条、中世の井戸2基、溝2条、土坑1基、時期不明の井戸1基、土坑1基等の遺構が検出されました。

ココヤシ製の容器が出土したのは、古代の井戸からです。この井戸は、発掘区の中央やや北西寄りの場所で見つかりました。井戸の掘形は、径約1.4mの平面円形で、円筒状に掘られていました。

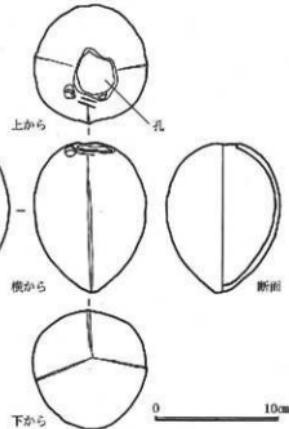
桿は、一本の丸太を削りぬいた極めて巨大なもので、径は約1.0m、残存する高さは約2.5m、厚さは最大8cmもあります。桿の下には丸瓦が敷かれていました。

また、水溜として、長径約0.7m、高さ約0.55m、厚さ約1cmの曲物を据えていました。曲物本体を締めて形を保つ簾は3条ありました。

井戸桿の中に堆積していた土の中から、ココヤシ製容器のほかに、9世紀前半頃の特徴を持つ上飾器Ⅲ（ほぼ完存）、そして須恵器の破片や丸瓦、平瓦が出土しました。このことから見て、井戸は都が平安京に遷ってしばらく後の頃に使用されていたと考えられます。

ココヤシ製の容器

ココヤシの実の内部には、「内果皮」と呼ばれる木質の固い殻があり、今回の出土品は、その部分をほぼそのまま利用して作られています。ただし、発芽孔の部分の穴をさらに大きく広げて、約3.0cmほどの孔に加工しています。表面の加工は、外周の纖維質を除去した他は、ほとんど手を加えていないようです。高さは12.3cm、横幅は9.8cmで、一見して長細い形をしています。形状等からみて、おそらくは容器として使用されていたものと推測されますが、底が尖ったままなので、中身を入れた状態で置くことはできません。外面には「手ずれ」の跡などのような、使い込んだ痕跡はほとんどありませんでしたので、日常品として頻繁に使用していたとは考えにくいでしょう。



出土ココヤシ製品図 1/4

植物としてのココヤシから ココヤシとは、元来熱帯地方が原産地の植物です。現在の日本国内でも、沖縄などのような温暖な地域では、数多く自生してはいますが、結実することはほとんどないとされています。よって現在では日本国内では実を生産することはできず、全て海外からの輸入に頼っています。

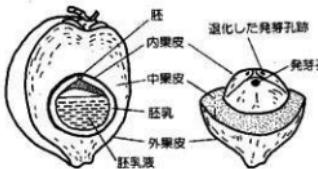
仮に、ココヤシ製の容器が出土した井戸が使われていた頃の日本列島の気候が、現在の気候とあまり変わらなかったのであれば、このココヤシの実は、日本列島以外の温暖な地域から、もたらされたものと推定することができます。

その経路としては、大きく二つの可能性が考えられるでしょう。ひとつは、熱帯からの海流に乗って自然に漂着したものが海浜に打ち上げられ、そして人に拾われた可能性があります。また一方では、海外地域との交易活動等により人為的に運ばれてきた可能性も考えられます。

今回出土したココヤシの実の体型を観察してみると、大きな特徴が見受けられます。それは、内果皮の高さと胴体の横幅の寸法とを比較すると、高さの方が大きいことです。現在世界各地に普及している品種は、今回出土したものとは異なり、高さと胴体の横幅が概ね同じサイズになっています。つまり、球形に近い体型をしていて、今回の出土物とは大きく異なる形をしています。

植物学的には、今回出土した実は「先祖種」として考えられており、かつてはヤシ種の主流を占めていたとされています。ところが、大航海時代が到来し、ヤシの実を船に積んで中の胚乳液を飲み水代わりに利用することが盛んに行われた結果、しだいに比較的多量の水分を含むタイプのヤシの実が好まれるようになりました。そして、そうした品種が人の手によって選抜されて、プランテーション農業で栽培されるようになった結果、現在の品種が世界中に普及することになりました。一方で先祖種とされる長細い形の実の品種は、今では極めて少なくなってしまったのです。

ココヤシ製品の実例から 本品の類例としては、正倉院南倉に収められている宝物の中にかなり類似した形態の品があります。ただし、正倉院



ココヤシ果実の形態と名称 模式図
(杉村順夫はか著『ココヤシの思ひ』家作房 1998 より転載)

宝物の例では、ココヤシ内果皮の上面を人面に見立てた加工・装飾が施してあります。すなわち、元々ある発芽孔を広げて容器の孔とした部分を口とし、また残りの二箇所の退化発芽孔の痕跡を目の部分として見立てて、墨等で月眼の模様を描き入れています。

このような装飾は、時代・地域を問わず、ココヤシの実を利用した加工品に時折みられるもののですが、今回の出土品についてはそのようなレイアウト上の意匠工夫をした様子があまり見受けられません。口を広げる際に、人面を想定してバランス良く加工しようとした意图が見受けられず、また孔の加工状況も正倉院宝物に比べるとやや稚拙です。さらには、他の二つの退化発芽孔に墨などで装飾を施した痕跡についても、確認できませんでした。

なお、ココヤシの実や、それを用いた製品は、全国各地で数例の出土例が報告されています。古くは縄文時代や弥生時代の遺跡から出土したものもありますが、そのほとんどの例は形状的には先祖種の体型をしており、前述のような植物学上の説を裏付ける結果ともなっています。

今回出土したココヤシ製容器は、平安京に遷都した後とはいえ、まだ多くの生活者が居たと推定される9世紀前半の平城京の宅地跡で使用されたと考えられます。この製品の素材であるココヤシの実が、果たしてどのような経路をたどってもたらされたのかは定かではありませんが、古代の都市において、ココヤシの実か、あるいは製品が稀少よりも流通し利用されていた可能性を示唆するものであり、極めて貴重かつ興味深い資料として位置付けられます。

さいだいじきゅうけいだい 西大寺旧境内で発見された埋甕遺構

西大寺旧境内 奈良市西大寺本町



調査位置図 (1/20,000)

平成15年度に、奈良市教育委員会が西大寺旧境内で実施した発掘調査で、古代の埋甕遺構が見つかりました。発見された場所は、現在の西大寺の北北東約300m付近にあります。この場所は、西大寺の伽藍復原では食堂院跡推定地に該当しています。食堂院とは、僧侶が食事を摂る場所です。

発掘調査は、合計332m²の発掘区を設けて実施しました。その結果、古代の埋甕遺構と凝灰岩列、掘立柱穴列、礎石据付穴、条坊（道路）側溝、そして、中世の土坑などの遺構が見つかりました。

今回の調査では、埋甕遺構は合計28基分を確認しました。埋甕は、約1.5mの間隔で据えられており、その列は発掘区外の北側および南側へと伸びています。遺構の様子からみて、少なくとも調査地内では東西4列、南北13列分の埋甕の存在が想定されます。

埋められている甕は、いずれも古代の須恵器で、胴回りの径は1.0~1.2mくらいと推測されます。発掘調査で検出された時には、下部の約1/3の部分が地中に埋まった状況で、その内部には甕自体の破片や古代の軒瓦などが多く落ち込んでいました。その中には、わずかながら土師器も含まれていて、遺構が埋まった年代を特定する手がかりとなりました。これらの埋甕遺構が廃絶するのは、およそ9世紀末~10世紀の初頭頃と考えられます。

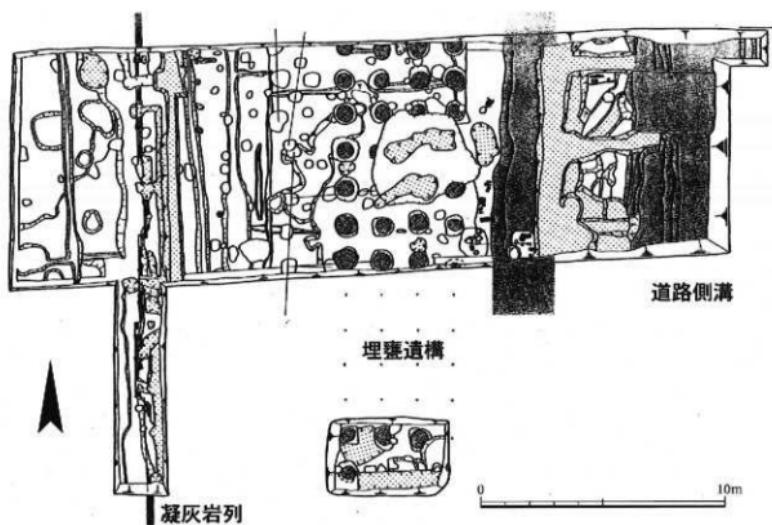
また、この埋甕遺構の西側で、埋甕遺構に並行する形で南北に連なる凝灰岩列も検出しました。これらの凝灰岩列は、残り具合があまり良くなく、詳細なことはわかりませんが、平城宮内寺院の主要伽藍の基壇でよくみられるような積み方ではないようです。ただし、一部には板状の石を置くなど、階段の跡ではないかと見受けられるような場所もあり、何らかの建物の外周を形成していた基壇の一部である可能性があります。そして、この凝灰岩列が廃絶する時期は、遺物の年代からみて、やはり9世紀末から10世紀初頭頃とみられます。

調査では、遺構の存する面が後世に削平されており、埋甕遺構群と凝灰岩列との関係を直接知ることはできませんでした。しかし、二つの遺構の位置関係や廃絶した時期がほぼ同じであることから考えると、これらは一体の遺構であった可能性が高いのではないかと推測されます。

ところで、創建当時の西大寺の伽藍の規模などを伝える「西大寺資財流記帳」(宝亀11〔780〕年)によると、食堂院地区には厨（台所）や倉という名称の付いた建物がいくつかあったことが記されています。そのように考えていくと、調査地はこの食堂院地区にあたるのですから、当然、厨や倉に伴って何らかの貯蔵施設があった可能性も推測できます。

埋甕遺構は、これまでに平城宮内や平城京内でもいくつかみつかっており、食料などの貯蔵を目的とした施設であったものと考えられていますので、今回の埋甕遺構群の発見は、それが「西大寺資財流記帳」に書かれている建物や施設そのものであるかどうかは別として、食堂院に関連性のある貯蔵施設であったことは充分に考えられます。

なお、今回の埋甕遺構群の規模は、平城宮・京内で確認されている例と比較すると、かなり大規模であることがわかります。こうしたことから、当時の西大寺食堂院内の様相を示す遺構として、きわめて注目されます。



遺構平面図(1/200)

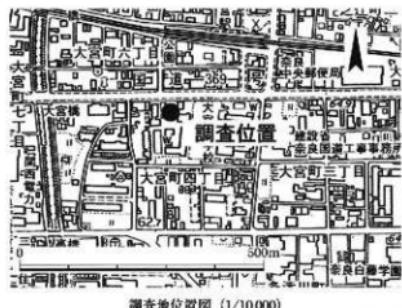
平城宮・平城京で確認された埋葬遺構

古墳・発見名	遺構番号	時期	方向	往復距離	対数	古墳・発見名	遺構番号	時期	方向	往復距離	対数
1 長持町	SH2975	古墳時代	南北	5×2	16	43 長3・3・4	SH2950	古墳時代	東西	(3)×2	20
2 長持町	SH2991	古墳時代	東西	9×2	19	44 長3・2・4	SH2960	古墳時代平安期	南北	(5)×2	4
3 長持町	SH23140	古墳時代	東西	3×4	11	45 長3・2・6	SH21552	古墳時代	東西	7×2	33
4 長持町	SH16730	古墳時代	東西	8×2	21-21	46 長3・2・16	SH227	古墳	南北	(3)×9	5
5 長持町	SH2004	古墳時代	東西	5×2	9-8	47 長3・2・16	SH63	古墳後半	東西	3×2	13
6 長持町	SH1603	古墳時代	南北	5×5	5	48 長3・1・13	SH1030	古墳	東西	3×2	11
7 長持町	SH1482	古墳時代	南北	5×2	4	49 長3・1・13	SH21	古墳	東西	5×4	15
8 長持町	SH2320	古墳時代	南北	9×2	11-19	50 長3・1・14	SH37	古墳後半?	東西	5×3	16
9 長持町	SH3011	古墳時代	南北	7×4	14	51 長3・1・14	SH74	古墳後半~末	南北	4×2	13
10 長持町	SH15954	古墳時代	南北	7×2	28	52 長3・1・16	SH225	古墳	東西	(5)×4	12-19
11 長持町	SH16730	古墳時代	南北	6×3	19-25	53 長3・1・16	SH217	古墳後半?	南北	6×2	5
12 長持町	SH19505	古墳時代	南北	7×2	39	54 長3・1・16	SH219	古墳後半?	南北	6×2	4
13 長持町	SH16727	古墳時代	南北	6×3	22	55 長3・1・19	SH03	古墳	東西	(3)×2	3
14 地質実習北区域	SH1803	古墳時代	南北	11×2	4	56 長3・1・19	SH5951	古墳後半~平安期	東西	5×4	4
15 地質実習北区域	SH2081	古墳時代	南北	7×4	39	57 長3・4・1・5	SH491	古墳後半~平安期	東西	7×2	17
16 地質実習北区域	SH2965	古墳時代~中	南北	6×4	28	58 長3・4・1・6	SH1000	古墳後半~末	東西	7×3	11
17 地質実習北区域	SH2955	古墳時代	南北	5×4	71	59 長3・3・3	SH956	古墳	東西	6×3	18
18 地質実習北区域	SH29522	古墳時代	南北	7×3	30	60 長3・3・3	SH293	古墳	東西	3×2	5
19 内堀3・4・5区域	SH25178	平安初期	南北	7×5	16	61 長3・3・3	SH219	古墳後半~後	南北	5×2	16
20 第一大太刀相隨遺跡	SHAI7941+17896	平安初期	東西	4×2	10	62 長3・3・3	SH397	古墳	南北	4×2	17
21 内堀町	SH450	古墳時代~末	南北	14×2	62	63 長3・3・4	SH214	古墳後半	東西	5×3	16
22 内堀町	SH450	平安初期	東西	6×3	15	64 長3・3・4	SH225	古墳	東西	5×3	10
23 大塚町	SH176	古墳時代	東西	8×4	15	65 長3・3・4	SH223	古墳	南北	5×2	11
24 大塚町	SH209	古墳時代	南北	7×2	28	66 長3・3・4	SH224	古墳	南北	5×2	2
25 大塚町	SH3212	古墳時代	南北	7×2	27	67 長3・3・4	SH226	古墳	東西	9×3	56-58
26 大塚町	SH2654	古墳時代	南北	9×4	31	68 長3・3・4	SH220	古墳	南北	5×2	17
27 大塚町	SH2655	古墳時代	南北	7×2	27	69 長3・3・4	SH221	古墳	南北	5×2	16
28 大塚町	SH2651	平安初期	南北	5×4	11	70 長3・3・6	SH244	古墳	南北	3×2	6
29 猪塚	SH430	平安初期	南北	8×3	6	71 長3・3・6	SH260	古墳	南北	3×2	6
30 長3・2・1-1	SH2768+2697	古墳時代	-	-	2	72 長3・3・6	SH228	古墳	南北	5×3	3
31 長持町	SH410	古墳時代	東西	(2)×2	4	73 長2・3・6	SH223	古墳	南北	4×2	8
32 長3・4・2	SH119	古墳時代	東西	(3)×2	8	74 長2・3・6	-	古墳	南北	5×3	17
33 長3・4・7	SH807	古墳	東西	5×3	22	75 長2・3・6	SH222	古墳	南北	5×2	2
34 長3・3・1・7	SH1760	古墳時代	南北	4×2	7	76 長3・2・1・5	SH119	古墳後半	南北	9×3	62-68
35 長3・3・1・7	SH7453	古墳時代	南北	3×3	6	77 長3・3・1	SH204	古墳	南北	5×3	9
36 長3・3・1・7	SH205	古墳時代	南北	3×3	4	78 長3・3・2	SH175	古墳後半?	南北	5×2	29
37 長3・3・1・7	SH207	古墳時代	東西	4×2	5	79 長3・3・3	SH23	古墳後半	東西	5×2	6
38 長3・3・1・7	SH111	古墳時代	東西	5×2	8	80 長3・3・3	SH174	古墳	南北	5×2	20-26
39 長3・3・1・7	SH303	古墳	東西	(2)×2	8	81 長3・3・3	SH270	古墳後半	東西	4×2	16
40 長3・3・1・10	SH7400	古墳	東西	10×2	4	82 長3・3・1・3	SH149	古墳後半	南北	5×2	18
41 長3・3・1・14	SH3036	古墳時代~平安期	東西	(2)×2	10	83 長3・3・1・4	SH1577	古墳後半	南北	5×2	25
42 長3・3・9	SH4060	古墳時代	南北	9×3	20	84 長3・3・1・4	SH1534	古墳後半	南北	4×3	9-2

玉田芳美「平城宮の酒造り」「文化財論叢」奈良文化財研究所 2002 より一部抜粋
(1~29は平城宮跡で、官衙名など、その他は平城京跡で、条・坊・坪で示した)

ひがしほりかわ 東堀河 —古代の人工河川—

平城京東堀河跡 奈良市大宮町四丁目



調査地位置図 (1/10,000)

近鉄新大宮駅から南西へ徒歩3分ほどの場所で、民間の開発工事に伴う事前の発掘調査を実施したところ、奈良時代の掘立柱建物をはじめ、大量の遺物を含んだ東堀河、護岸施設等、数々の遺構を検査しました。東堀河は、奈良時代につくられた人工の河川で、物資の運搬をするにあたって重要な位置をしめていたようです。この地域で東堀河を発見した意義は大きく、東堀河の施工計画を知る上での重要な成果となりました。

調査の概要 東堀河が検出された場所は、平城京の条坊復元では、左京三条三坊十一坪に相当するところです。

今回検出した東堀河は、川幅が何回か変わったようで、一番狭い時の川幅は約5.1m、広い時は、西岸が発掘区外となるため正確な川幅はわかりませんでしたが、幅12.2m以上もありました。掘削は2段掘りで、東岸には、幅約2.0~3.2mのテラス(平坦面)があり、以下ながらに川底へいたります。川底の形状は、一部侵食されていますが、ほぼ平坦です。最深部は、検出した面からの深さが約1.5mあり、また、川底の標高(発掘区の北端60.5m、南端60.3m)からみて、東堀河の水は、これまで通り、北から南へと流れていることがわかりました。

東堀河が埋まつた土(堆積土)は、大きく4層に大別でき、上から順に黄灰色系の粘土・灰色砂

質土(上層)、黒灰色粘土(中層)、灰色砂砾(下層)、灰色粗砂(最下層)となっています。川底に最下層の砂(厚さ0.3m)が堆積した後に、一旦、東堀河の幅を狭めた時期があり、部分的に護岸工事を行なった形跡が残っていました。この時の東堀河の幅は約5.4mで、西岸に沿って南北1列に木杭を打ち込み(14本分検出)、東ねた小枝を杭の西側にあてがい、黒色粘土で固めて養生していました。水の侵入をせきとめるための工事と考えられますが、灰色砂砾(下層)が堆積した頃に再び川幅が広がり、護岸杭がまたたく間に埋没した様子がうかがえます。この下層と最下層の堆積土は、明らかに流水によるものであり、当時の東堀河の水流がかなり激しいものであったことを示しています。中層の黒灰色粘土が堆積した頃は、水が淀んだ状態になっており、川幅は5.1m、深さも1.0mと小規模になります。この頃は、惠美の漂う汚い川になっていたのではないでしょうか。上層に堆積している黄灰色系の粘土および灰色砂質土は、東堀河を最後に埋めた土です。東堀河は、10世紀前半頃までにはその姿を消すようです。

東堀河の出土遺物 奈良時代から平安時代にかけての土器、土製品、瓦、木製品、金属製品、鐵貨が遺物整理箱で約70箱分出土しました。日常雑器の他に、斎串、人形、土馬、人面墨書き土器等の祭祀遺物も見つかっています。これまでの発掘調査でも東堀河からは多量の祭祀遺物が出土しています。このことは、東堀河は物資運搬だけではなく、平城京の住民にとって祭祀を行なう絶好の場であったことを物語っているのでしょうか。

東堀河東岸の空間地 今回の調査では、東堀河の東岸で掘立柱建物を検出しています。建物は、東岸から2.0m以上の間隔をあけて構築されていました。過去に実施した東堀河の調査例でも、東岸に沿って約3.0~6.0m幅の空間地があることが判明しています。この空間地は、一種の道路として使われていた可能性が高いと考えられています。

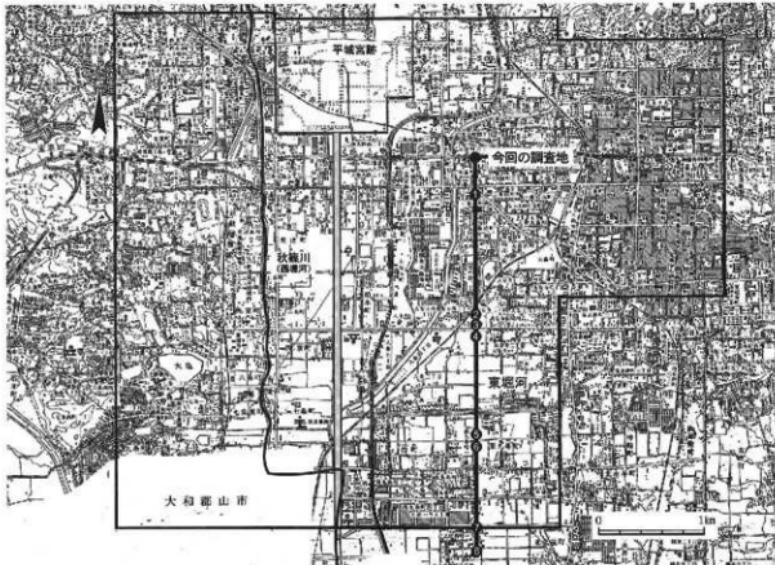
東堀河と西堀河 平城京の堀河について、もう少し詳しく記しておきます。平城京や平安京には、物資を運搬するためにつくられた堀河が2条あります。左京にあるのが東堀河で、右京にあるのを西堀河と呼んでいます。

平城京の東堀河は、これまでの発掘調査で、左京四条三坊十坪から南へ向かって流れ、九条大路を突き抜け、平城京外約50mまでつくられていたことが判明していましたが、三条以北がどのようにになっていたのかわかつていませんでした。

今回の調査で、三条の地域にまで施工されていたことが判明しましたので、東堀河はこれまで考えられていたところより、もう少し北からつくられており、奈良時代に左京二条大路付近（現在の

近鉄新大宮駅の西側）を西流していたと考えられている旧佐保川から端を発している可能性が高まってきたました。

一方、右京にある西堀河は、本格的な発掘調査が行われていないため、どのような構造で、どこを流れていたのかよくわかつていません。「護国寺本裏師寺縁起」や「今昔物語」の文献資料中に西堀河についての記載があり、位置関係等の検討から、現在の秋篠川を西堀河と呼んでいたことがわかります。現在では、秋篠川が西堀河であるとの説が有力です。平城京廃都後に西堀河としての機能が失われても、もともと自然の河川である秋篠川は、東堀河とは違い、現在に至るまで埋められることもなかったのでしょうか。



今回の調査地	平城京左京三条三坊十一坪	(市・HJ第499次調査)
地図番号1	平城京左京四条三坊十坪	(市・HJ第314次調査)
地図番号2	平城京左京六条三坊十坪	(市・HJ第284次調査)
地図番号3	平城京左京六条三坊十坪	(市・HJ第52次調査)
地図番号4	平城京左京六条三坊十一坪	(市・HJ第138・141次調査)
地図番号5	平城京左京八条三坊九坪	(国・1975年度調査)
地図番号6	平城京左京八条三坊十坪	(市・TI第4次調査)
地図番号7	平城京左京九条三坊十一坪	(国・1982年度調査)
地図番号8	平城京外	(市・HJ第296次調査)

平城京の東堀河・西堀河と調査位置図・表

へいじょうきょう じょうばうどうろ 平城京の条坊道路 ——交差点と橋—

平城京跡（左京五条四坊） 奈良市大森町



JR奈良駅から南へ500m程の場所に広がる水田地帯で進められている奈良市の区画整理事業に関連して、発掘調査を行ったところ、平城京東四坊大路と五条条間北小路の交差点を明らかにすることことができました。また、大路、小路それぞれの道路側溝に架かる橋が残っていることもわかり、奈良時代の道路事情を知る貴重な成果を上げることができました。

調査の概要 これまで、今回の発掘区の北側で平成13・14年の2カ年にわたり発掘調査を行っており、東四坊大路とこれに面する左京五条四坊十六坪の宅地を見つけています。また、平成13年には西へ2坪分行った東四坊間路と五条条間北小路の交差点でも調査を行っており、東四坊間路の東側の道路側溝と五条条間北小路の南北両側の道路側溝を見つけています。これらの調査により、この周辺では地形との関係から、南北方向の道路排水が、最も地形の低い位置にある五条条間北小路の道路側溝に集められ、西へ流されていることがわかつています。

今回の発掘調査で発見した遺構には、東四坊大路とその東側の道路側溝、五条条間北小路とその南北両側の道路側溝、道路側溝に架かる橋、側溝の護岸、五条五坊一坪の東面及び南面を区切る築地塀、その塀の雨落溝、排水のための暗渠、宅地内の建物、塚、溝、土坑があります。

東四坊大路と五条条間北小路の交差点を検出しましたが、このとき条間北小路の北側道路側溝が東四坊大路の路面を横断するように造られていることが明らかになりました。

東四坊大路は幅が17.4mある南北方向の道路です。路面は中央から両側の道路側溝に向かい緩やかに下り、舗装状になっています。道路の中軸線に合わせて、条間北小路の北側道路側溝を渡る木橋が架けられています。この橋の上流側には、多くの祭祀遺物が溜まっています、人面墨書き土器や、ミニチュア土器、土馬、轆車、大型の人形などが出土しました。さらに、道路側溝の北岸近くから多くの馬の骨も出土しています。また、この橋の近くでは側溝からの水の溢れによって路面が大きく浸食され、溝が最終的に埋まる段階では溢れた水で湿地状になり、通行可能な路面幅は3m程度になっていました。この状況は条間北小路との交差点南側でも同様に見られ、側溝の水が想像以上に路面に溢れていたことが窺えます。

一方の五条条間北小路は、道路の幅が6.7mある東西方向の道路です。道路の中軸線よりやや寄りの位置で、東四坊大路の東側道路側溝を渡るための橋が架けられています。

条坊道路の交差点 今回の調査で確認した条坊道路の交差点では、交差点の路面に道路側溝からの水が大きく溢れ、おそらく当時の人は通行に難渋していたであろうと窺えます。また、大路の路面を小路の道路側溝が横切り、周辺の地形に合わせた排水が囲られていることがわかりました。これは平城京の条坊施工にあたり、どの程度当時の地形が影響したのかを考える上で良好な資料を得られたと言えましょう。さらに、道路側溝に架かる橋の近くからは多くの祭祀遺物が見つかっていますが、これらは道路交差点などで行われる祓、道霊祭、もしくは祈雨祭に関連した出土品であると考えられます。どのような人々が、道路交差点に集まり、まじないに参加したのでしょうか。

平城京で行われる最も大きなまじないが、国家的行事である大祓でした。この大祓は天皇と都城を災いから守る目的で行われたもので、朱雀門の南で毎年6月・12月晦日に行なうほか、臨時に大嘗祭、疫病流行などに際しても行われました。一方、平城京の各場所でも、いろいろなまじないが執り行われていました。

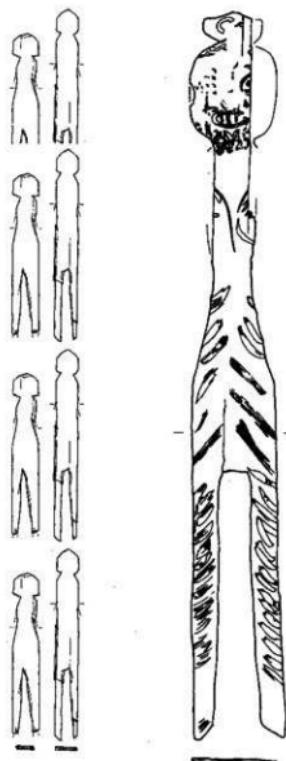
この時代に行われるまじないの多くは招福除災を目的として、道教の思想に基づき行われるものであり、大祓などの国家が行なうものと、個人や共同体が行なうものがありました。

平城京の条坊道路や道路の交差点などで行われたまじないについて、もう少し見てみましょう。このような場所で行われるまじないは、大きく祓に関するものと、雨乞いなどの祈願に関するものに分けられると考えられています。

平城京の調査の中で出土するまじないに關係する遺物には、人形、簀串、人面墨書き土器、土馬などがあります。このうち、人形、人面墨書き土器などは主として祓に関連して用いられる祓具であると考えられています。この当時、災厄は疫病神や鬼神が人に取り付くことからおこると考えられていましたので、人形や、顔を墨書きした土器に祓れを移して、水に流して祓れを祓うのです。この人形や土器に描かれた顔は疫病神や、鬼神そのものを表していました。簀串は、この祓れを祓う場所の結界を表し、祓われた祓れを外に漏らさぬため用いられます。

一方、土馬は雨乞いのために用いられたものと考えられています。馬は汎世界的に水神と結びつけられることが多く、これを土馬で模し、一部を打ち欠くことによって、水神への生け贋を擬制したのです。ところで、牛馬を屠殺して漢神の祭りに用いることを禁じた記載が『続日本紀』などにみられます。土馬を用いる一方で、本当に馬を生け贋とすることがあったのです。雨乞いのためか、疫神対策のためかは意見が分かれるところですが、実際に生け贋が都の大路で流行っていたことは間違いない、今回の調査で出土している馬の頭骨もまた、生け贋とされたものであったのでしょうか。

大型の人形 今回の調査で全長75cmを超える人形が1点出土しています。奈良時代中頃までの人物は大きいものでも1尺(30cm)を超えるものはほとんどありませんでしたが、時代が新しくなると徐々に大型化するようになります。奈良時代末から平安時代には60~130cmもあるような大型の人形が見られるようになります。今回の大型人形もおそらく奈良時代末頭のものであると考えています。このような大型の人形は、平安時代の御腰の式次第を記した文献記事に「等身人形」とみられるようなものではないかと言われています。

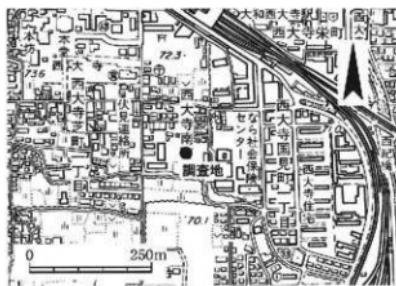


通常の人形（参考品）

無清出士の人形品

いと 井戸から出土した平城京の暦

平城京跡（右京二条三坊一坪） 奈良市西大寺南町



調査位置図(1/10,000)

近鉄西大寺駅から南へ徒歩5分ほどの場所で行なった、西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査で、漆紙文書が出土しました。

調査地は、平城京の条坊復元では、右京二条三坊一坪の中央北端にあたりますが、周辺で行なわれたこれまでの調査では、奈良時代の遺構はほとんど残っておらず、中・近世の溝が残っているだけでした。

調査の概要 今回は、奈良時代から平安時代に

へいじょうきょう こよみ

かけての井戸2基、土坑2基、中・近世の溝などを検出しました。

漆紙文書が出土したのは井戸からです。井戸の掘形は、一辺約2.4mの平面隅丸方形です。井戸枠は、方形紙板組横棟留と呼ばれる構造で、内法は約0.9mです。この井戸からは漆紙文書のほかに、8世紀後半から9世紀初頭の土師器、須恵器、漆が付着した壺、丸瓦、平瓦などが出土しました。

漆紙文書 漆紙文書は全部で12片が出土しました。奈良文化財研究所に解説を依頼した結果、「オモテ面」には、下記の通り、大衍曆による宝亀9（778）年5月29日から6月7日までの具注暦が記されていることがわかりました。また「漆面」にも「去就」「權」「位」「□〔変カ〕」などの文字が確認できましたが、その内容は不明です。

この具注暦は、漆紙文書としては、都城跡で初めての出土となります。また、大衍曆によるものとしても、宮城県多賀城跡から出土した宝亀11（780）年の漆紙文書よりも古く、最古の例となります。

平城京跡（右京二条三坊一坪）		井戸出土漆紙文書
（オモテ面）		
六月	一日景子水破	廿九日乙亥火執
	二日丁丑水危	内□候力
三日戊寅土成		大口
四日己卯土成		大小
五日庚辰金	〔收カ〕	
六日辛巳金開		
七日壬午木閉		
大夫豐	甲手足	
大歲後天恩	大歲後天恩カ	
	温風至候節外	
	小暑六月カ	
（ゴチフカ体は墨の殘る字、明治体は墨可能な字）		

漆紙文書について 漆を使用する場所では、器物や土器などの容器のなかに漆の樹液を保存します。この時、漆の乾燥を防ぎ、塵や埃を避けて、常に漆を良好な状態に保つように、和紙を漆液の表面に密着させて、蓋とします。これを「ふた紙」と呼びます。塗り作業の際には必ずされて廃棄されます。しかし、漆が紙に滲みこむと、漆の力により、土中にあっても腐食や劣化はないので、残りやすくなります。「ふた紙」は、多くの場合、役所で不用になった公文書を利用しています。そのため、「ふた紙」の発見がそのまま、新たな文書の発見につながることが多いのです。これを漆紙文書と言います。「ふた紙」として使用された反故には両面ともに文字が記されているのがふつうです。当時、紙は貴重品であったので、文書が用済みになるとその裏(紙背)を再利用しました。

漆紙文書を読み解く際に、「ふた紙」の外側の面を「オモテ面」と呼び、漆液と密着し、漆が紙に付いた内側の面のことを「漆面(または漆付着面)」と呼んでいます。これは、本来の文書の表と裏(紙背)とは関係ありません。

具注曆について 具注曆とはいまのカレンダーのことです。「注」が具(つぶさ=詳細)に記入されることからこの名があります。具注曆の記載は大きくわけて上段、中段、下段からなります。

上段は日付、干支、納音、十一直が、中段には一十四節氣、七十二候、六十卦、望、上・下弦などが、下段には毎日の吉凶、福禍など科学的根拠のない暦注が書かれています。

律令によると、毎年11月1日に陰陽曆が作成した翌年の暦を中務省に送り、中務省が天皇に奏上します。これを御曆と言います。そののち新年が来る前に中央や地方の役所に1巻ずつ支給されます。平安時代の『延喜式』によると、天皇用の御暦2巻は、上巻(正月から6月)、下巻(7月から12月)によって1年分の具注曆とされます。それ以外に中央や地方の役所に頒布する暦(頒曆)は166巻と記載されています。これらの書写はその年のうちにすまさなければなりませんから、かなりの早さで行なわなければなりません。作業の大変さを物語るように、正倉院に残る具注曆をはじめとして、各地で出土している漆紙文書の具注曆には必ずといっていいほど誤写があります。今回出土した暦も、本来なら6月6日にあるべき「手足甲」の記載が、1日ずれた6月5日につあり、また、葬事記事が書かれていないからてします。「手足甲」の意味は手と足の甲(爪)を切ることです。具注曆にはこのようなことまで細かく書かれていて、当時の人はその指示に従って生活していたものと思われます。

遺跡名	種別	暦年	暦名
1 右神遺跡(奈良県明日香村)	木簡	持明天皇3(689)年具注曆	元嘉曆
2 城山遺跡(静岡県浜松市)	木簡	神龜6(天平元、729)年具注曆	儀鳳曆
3 武藏台遺跡(東京都府中市)	漆紙文書	天平勝宝9(757)年具注曆	儀鳳曆
4 秋田城跡(秋田市)	漆紙文書	天平宝字3(759)年具注曆	儀鳳曆
5 山王遺跡(宮城県多賀城市)	漆紙文書	天平宝字7(763)年具注曆	儀鳳曆
6 平城宮跡(奈良市)	木簡	牛年詳具注曆	儀鳳曆
7 平城京跡(右京二条三坊一坪)	漆紙文書	宝龜9(778)年具注曆	大衍曆
8 多賀城跡(宮城県多賀城市)	漆紙文書	宝龜11(780)年具注曆	大衍曆
9 鹿の子C遺跡(茨城県石岡市)	漆紙文書	延喜9(790)年具注曆	大衍曆
10 胥沢城跡(岩手県水沢市)	漆紙文書	延喜22(803)年具注曆	大衍曆
11 胥沢城跡(岩手県水沢市)10の裏面	漆紙文書	延喜23(804)年具注曆	大衍曆
12 大浦B遺跡(山形県米沢市)	漆紙文書	延喜23(804)年具注曆	大衍曆
13 鹿の子遺跡c地区(茨城県石岡市)	漆紙文書	年代未詳(延喜年間か)具注曆	大衍曆
14 多賀城跡(宮城県多賀城市)	漆紙文書	弘仁12(821)年具注曆	大衍曆
15 胥沢城跡(岩手県水沢市)	漆紙文書	嘉祥元(848)年具注曆	大衍曆
16 東の上遺跡(埼玉県所沢市)	漆紙文書	年未詳具注曆	大衍曆
17 磐岡遺跡(栃木県宇三川町)	漆紙文書	年未詳具注曆	宣明曆
18 多賀城跡(宮城県多賀城市)	漆紙文書	年未詳具注曆	不明
19 払田橋跡(秋田縣仙北町)	漆紙文書	年未詳具注曆	不明

出土した古代の具注曆

うさきおおがたこふん 埋もれていた佐紀の大型古墳

(仮称) 法華寺垣内古墳／平城京跡 奈良市法華寺町

調査地は、平城京の条坊復原では、左京一条三坊四・五坪にあたります。四坪・五坪ではこれまでに調査が行われておらず、今回が初めての調査です。

調査地の西側には、法華寺や海龍王寺等があります。法華寺は、もととは平城京遷都に大きな力を発揮した藤原不比等の邸宅でしたので、この周辺には有力な貴族が住んでいたことが想定されます。

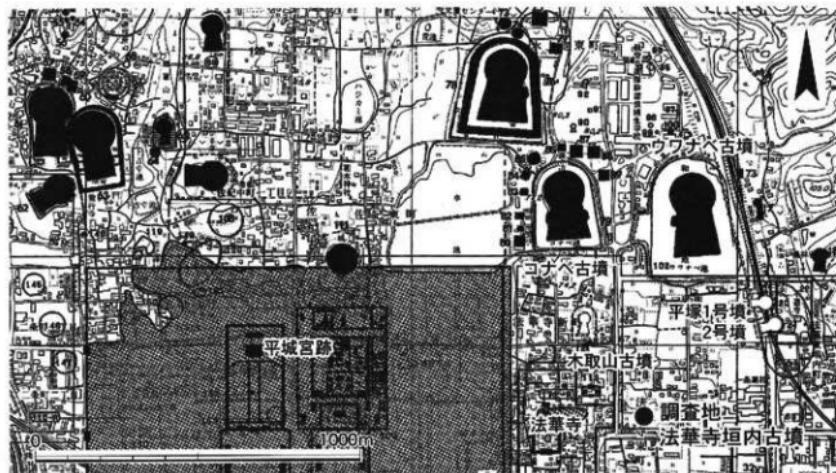
調査地は四坪と五坪にまたがっており、その間の坪境小路を確認することやそれぞれの宅地内の様相を知ることなどを目的に、6つの発掘区に分けて調査を行いました。ところが、坪境小路はなく、また、奈良時代の遺構は少ないとわかりました。坪境小路がないということは、四坪と五坪が同一の宅地として利用されていたのかもしれません。

また、奈良時代の遺構のほかにも、古墳時代や平安時代、鎌倉時代の遺構も見つかりました。

新発見の古墳 古墳時代の遺構では、古墳の葺石と周濠を部分的に検出しました。この古墳は、新発見の古墳で、土地の字名から仮に法華寺垣内古墳とよぶことにします。

この古墳は、葺石を検出した位置から推測すると、後円部を北にした南北方向を主軸とする前方後円墳になると考えられます。全体の規模はわかりませんが、前方部の前端幅は約65mになりそうです。

今回3ヶ所で検出した葺石は、前方部の東、西、南(前端)の葺石にあたると思われます。前方部東側の葺石は崩れしており、残り具合があまりよくありませんでしたが、西側と南側とではよく残っています。大型の石材を基底石に使っていることがわかりました。西側の葺石は高さ0.9m分が残っていました。葺石の石材は、丸みをおびず、角を残すものが多いという特徴から、佐保川の河原石が使われているようです。



調査地位置図 (1/15,000)

佐紀古墳群と法華寺垣内古墳 調査地の北側には大形前方後円墳を含む佐紀古墳群が存在し、北約200mのところにはウワナベ古墳やコナベ古墳があります。法華寺垣内古墳も佐紀古墳群を構成する古墳の一つになると思われます。

法華寺垣内古墳では、円筒埴輪や朝顔形埴輪、家や舟や竈を象った形象埴輪が出土しています。円筒埴輪の特徴から、この古墳は5世紀前半頃の古墳と考えられます。これは、コナベ古墳とほぼ同じ時代と考えられます。

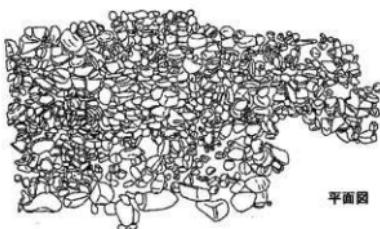
平城京と古墳群 佐紀古墳群では、平城宮・平城京造営の際に壊された古墳が、発掘調査で、いくつかみつかっています。調査地の周辺では、ウワナベ古墳の東南でみつかった平塚1・2号墳やコナベ古墳の南でみつかった木取山古墳がそれもあります。おそらく、法華寺垣内古墳もそれらと同じく、平城京造営の際に削平されたものと思われます。奈良時代のできごとを記した『続日本紀』には、都を造るにあたり、墓を壊した際には手厚く葬れ、という命令がでていることが記されています。

法華寺東方出土の長持形石棺

法華寺垣内古墳に関して、興味深い資料があります。それは、法華寺の東方、通称一条通りで出土したと伝えられる長持形石棺の蓋石の破片です。出土地は、調査地のすぐ南にあります。この石棺は、現在、横浜市の三溪園にあります。

長持形石棺は、古墳時代中期の組合わせ式の石棺で、蓋石、底石と側石4枚の6枚からなります。また、長持形石棺は、全長100m以上、なかでも150m以上の前方後円墳の埋葬施設として用いられることが多いようです。

法華寺東方出土の長持形石棺は、これまでに平塚古墳（全長約70m）やコナベ古墳（全長210m）に用いられていた石棺ではないかと考えられていました。新発見の法華寺垣内古墳は、前方部の幅から推測すると全長が100mをこえると思われ、また、石棺の出土位置とも近接しています。法華寺垣内古墳がこの石棺を用いていた古墳である可能性もあるでしょう。



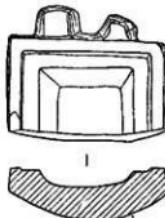
平面図



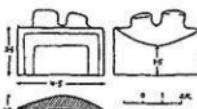
立面図

前方部西側の葺石図 1/50

ところで、前方部の東南角で検出した石積みは、西側や南側の葺石とは斜面の傾きが異なり、石が置き直されているように見られます。石材も意識的に小ぶりの円錐が使われているように思われます。平塚古墳では奈良時代に古墳の葺石を園池の一部に利用しており、法華寺垣内古墳でも同様に古墳の葺石が庭園に利用されたかもしれません。



0 1 m
土生田純之「横浜市三溪園の石棺」1987より抜粋



梅原末治「久津川古墳研究」1920より抜粋

法華寺東方出土の長持形石棺図
(上・下図は同じ古墳)

こふんじだい おおがたほったてばしらたてもの しゅうらく 古墳時代?の大型掘立柱建物と集落

(仮称) 西大寺東遺跡／西隆寺跡 奈良市西大寺東町一丁目



調査位置図 (1/10,000)



建物の平面図 (1/250)

近鉄西大寺駅の北200mほどの場所にある旧正強学園体育馆跡地は、奈良～平安時代の尼寺、西隆寺跡の北西部に当たります。近隣の調査で、この地には掘立柱建物などの奈良～平安時代の遺構があることが知られていましたが、平成16年度に西大寺近隣公園の整備事業に伴い、発掘調査を行なったところ、奈良時代や中世の遺構とともに大型の掘立柱建物をはじめとする古墳時代以前の遺構を多数発見しました。

調査の概要 今回見つかった古墳時代以前の遺構には、掘立柱建物1棟、掘立柱列2条、溝12条、土坑2基があります。いずれも時期を確定できる出土遺物がなく、詳細な時期は不明ですが、重複関係から少なくとも5回の変遷があると考えられます。

この中に注目すべき遺構は、幅20～30cmの溝に

開まれた掘立柱建物で、平面の規模は確定できないものの、北に対し約22度西に振れる大型の建物と考えられます。柱穴は、長辺1.3～1.7m、短辺1.0～1.2mの長方形を呈し、深さ1.0～1.1mと非常に大型です。この内、東端と中央の柱穴には、檜製の角柱が良好に残っていました。東端の柱が22cm×55cmで高さ70cm、中央の柱が17cm×55cmで高さ85cmまで残っていました。東端の柱は長辺を東側に、中央の柱は長辺を北側に向けて据えられており、ちょうど建物の壁に沿うように立てられていましたと考えられます。奈良文化財研究所で年輪年代を測定していただいたところ、この角柱は西暦250年以降に伐採されたことがわかりました。

奈良時代の遺構には、掘立柱建物1棟、掘立柱列1条、溝2条、土坑1基等があります。掘立柱建物は梁闊2間(3.0m)、桁行7間(18.9m)の東西棟建物で、昨年北隣の調査で確認した大型の掘立柱建物と柱筋を揃えており、同時期のものと考えられます。柱穴からは8世紀の土器と多量の瓦が出土しました。

なお、中世の遺構としては、瓦の出土した土坑が1つ見つかっています。

以上のように、今回の調査では、当初予想されていなかった古墳時代以前の遺構を多数検出し、古墳時代以前の集落の一部を確認できました。なかでも、角柱が、大型建物の壁に沿った方向に据えられていた可能性を見いだせたことは、当時の建物構造を知る上で、貴重な成果といえるでしょう。なお、当地から100mほど南南東の場所で行われた調査でも、ほぼ同じ規模・形状・材質の角柱が見つかっており、それも西暦265年以降に伐採されたとされていることから、今回見つかった掘立柱建物と何らかの関連があると思われます。

また、奈良時代の掘立柱建物と西隆寺との関係は、まだよくわかりませんが、近隣の調査成果から、少なくとも3棟の掘立柱建物が近接して並んでいたと考えられます。

大型掘立柱建物と西大寺東遺跡 今回見つかった角柱の掘立柱建物跡からは、建てられた時期がわかるような遺物が出土しませんでしたが、建物主軸の方向、奈良時代建物との重複関係、柱の年輪年代からみて、奈良時代より前の遺構であることが間違いなさそうです。それでは、いつの時代のものでしょうか。

近鉄西大寺駅周辺の遺構・遺物の分布を見てみましょう。右図は、時代ごとに西大寺駅周辺の古墳時代以前の遺構・遺物の分布をみたものです。

縄文時代の遺構は、秋篠川西岸の地域に晩期の溝が1例みられるのみです。また、弥生時代には、井戸や堅穴建物とみられる遺構がありますが、秋篠川東岸に分布しています。

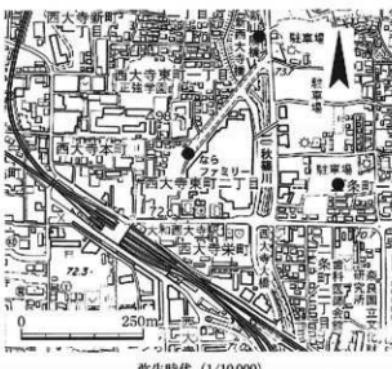
古墳時代になりますと、遺構・遺物の数量が、増えてきます。その分布は、秋篠川東岸の地域にもみられますが、今回の調査地に近い秋篠川西岸の地域に多くみられるようになります。遺構・遺物には、土坑や掘立柱建物、堅穴建物とみられる遺構があり、また、河川が運んだ土砂の堆積からも土器などの遺物がみつかっています。こうした遺構・遺物は、古墳時代の前期・中期・後期の各期にわたってみられます。

このように、近鉄西大寺駅周辺には、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が広がっており、地形からみて、秋篠川西岸の地域をひとまとまりとして考えることができます。これを地名から、仮に西大寺東遺跡と呼ぶことにします。

ところで、今回見つかった掘立柱建物は、西大寺東遺跡の遺構・遺物の密度からみて、古墳時代に建てられた可能性が高いものと判断できます。そして、建物や柱の規模・形態からみて、集落の一般的な建物とは、異なるものと思われます。また、こうした建物がいくつか存在することも予想されます。古墳時代の西大寺東遺跡が一般的な集落と異なるのか、それとも、一般的な集落の中に特殊な建物があるのかは、まだわかりません。遺跡の北西には、大型前方後円墳を含む佐紀古墳群が存在しており、古墳群について考える上でも、重要な遺跡といえるでしょう。建物の正確な年代を知りたいところです。



縄文時代 (1/10,000)



弥生時代 (1/10,000)



古墳時代 (1/10,000)

近鉄西大寺駅周辺の遺構・遺物分布（縄文～古墳時代）

さいだいじじち しひ 西大寺寺地から出土した鷲尾

西大寺旧境内 奈良市西大寺南町

奈良市教育委員会では、昭和63年度以来、近鉄西大寺駅南上地区画整理事業に係る発掘調査を継続して実施しています。平成16年度には、西大寺旧境内で実施した発掘調査で、屋根の大棟の両端を飾っていた奈良時代の鷲尾が出土しました。鷲尾の出土例は珍しく、貴重な発見となりました。

この調査は、現在の西大寺境内の東側で行いました。平城京の条坊では、右京一条三坊三坪に当たり、奈良時代後半に西大寺が建立された後は、主要伽藍の東にある寺地の一角となります。

調査の概要 調査では、1,000m²の範囲を発掘しました。現地表下約0.8mで遺構のある面に達します。この面で、掘立柱建物4棟、掘立柱塀7条、井戸8基、土坑11基などを見つけました。建物の数に比べ、井戸の多さが目立ちます。

発掘区西半では、奈良時代の終り頃に桁行6間(16.2m)、梁間3間(8.1m)の西庇付の南北棟となる大きな建物が建ち、その東3.9m離れた位置には、建物に平行して、南北13間(27.0m)以上の塀が造られています。

平安時代以降には、小規模な建物とそれを区画する塀が造られるようになります。そして、最も新しい塀は近世に入ってから造られたものである

ことがわかっています。

井戸には、奈良時代のものから室町時代に至るものまで様々な時代のものがあり、井戸枠が残るものと、枠は抜き取られ、井戸底に用いた部材だけが残っているものがありました。井戸枠の構造には、①縦板を方形に組み四隅の柱と横棟で留めるもの、②横板を方形に積み上げるもの、③石を円形に積み上げるもの、④瓦を円筒状に積み上げるもの、⑤縦板を連結して、円筒状にするものなど、多様なものがありました。また、井戸底の水溜には、板を方形に組み、枠状としたもの、桶、曲物、甕などが使われていました。

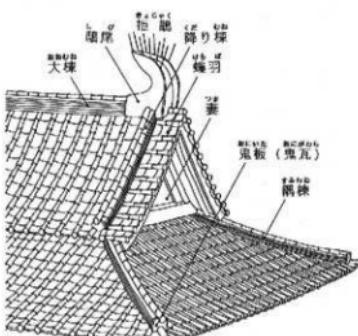
さらに、土坑11基のうちの数基には、平面形や深さ、埋土の堆積状況を考えると、枠が完全に抜き取られた井戸と考えられるものがあることから、発掘区内に造られていた井戸の数がさらに増加する可能性があります。

これらの状況から、一帯は西大寺の寺地として、長期にわたり利用されていた様子を窺うことができます。

今回、発見した鷲尾は、瓦製で、発掘区東半で発見した平安時代初めの井戸枠内と室町時代の土坑から、計2点が出土しました。



調査地位図 (1/10,000)

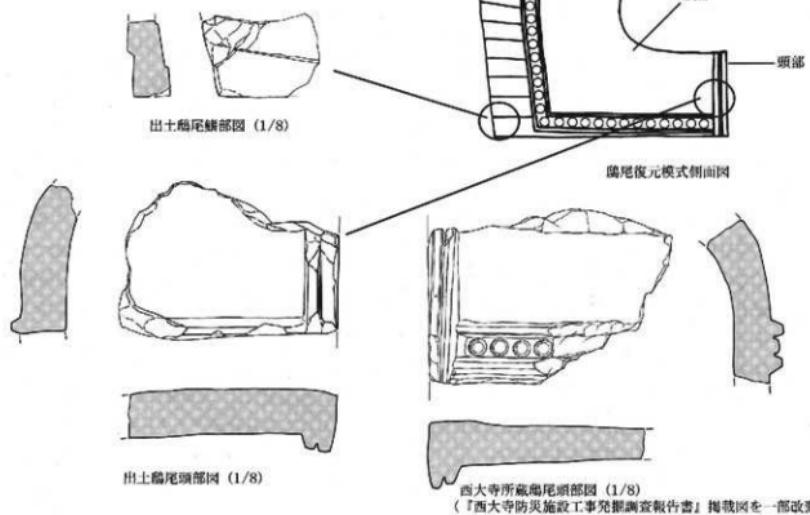


屋根の部分名称 (『日本の美術 第392号 鷲尾』から引用)

鷲尾とは、屋根の大棟の両端を飾る瓦の一種です。飛鳥時代に中国から日本に伝えられ、宮殿や寺院の主要な建物に飾られたと考えられています。瓦製のほか、石・銅・鉛・木製の鷲尾があったようです。古代の鷲尾は、飛鳥寺、四天王寺、山田寺などの出土品や唐招提寺の伝世品が有名です。特に唐招提寺金堂の屋根を飾っていた瓦製鷲尾は、現存する唯一の奈良時代のものです。

文献中の鷲尾 平城京内の寺院に飾られた鷲尾については、文献にもその存在が記されています。奈良時代の「西大寺資財流記帳」、「正倉院文書」には、西大寺薬師金堂や法華寺阿弥陀淨土院金堂で、金銅製鷲尾が使われていたとする記録があります。また、平安時代の史料や絵画からも鷲尾の存在が窺えます。奈良・平安時代の宮殿や寺院の主要な建物には、金銅製を最上級とする鷲尾がのせられていたようです。

出土した鷲尾 鷲尾は、頭部、胴部、縦帯、鰐部に区分されています。今回、出土した鷲尾は、頭部と鰐部の断片です。頭部は、下部に横方向の突帯1本が、端部に縦方向の突帯2本があります。鰐部は、表裏面ともに段が確認できます。



鷲尾の復元 ところで、西大寺の所蔵品の中に、瓦製鷲尾の頭部があります。形状や大きさ、頭部に特徴的な突帯2本があるなど、今回出土したものとの共通点があります。今回の出土品と西大寺の所蔵品をもとに、鷲尾を復元してみると、鰐部や珠紋帯の表現などが、唐招提寺金堂の瓦製鷲尾によく似ていることがわかります。およそ、下図のように復元できるのではないかと考えております。非常に立派な鷲尾であったと想像できます。

先述の通り、西大寺では、薬師金堂に金銅製鷲尾が飾られていたとはされていますが、瓦製鷲尾の記録はみられません。今回出土した瓦製鷲尾が、西大寺のどの建物に使われていたのか、興味の尽きないところです。今後、調査をすすめていきたいと考えています。

へいあんじだい 完存していた！平安時代の鏡 六稜鏡

平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡 奈良市今小路町



調査位置図 (1/10,000)

奈良町と京街道 奈良町とは、興福寺・東大寺を中心として栄えた近世都市奈良を指し、東西約1.8km、南北約2.9kmの範囲は、ほぼ奈良市の旧市街地にあたります。

この奈良町と京都を結ぶ街道があり、京街道と呼ばれました。現在の奈良県庁の東から、東大寺を右に見て奈良坂を越えて京都に向かう旧国道24号線がそれにあたります。この京街道は、奈良時代には平城京の東端の道路である東七坊大路で、道路を挟んで西側が平城京内、東側が東大寺境内となっていました。

今回の調査地の今小路町は、この街道の両側に広がる町で、北は東大寺の軒轅門から南は焼門に至ります。都が長岡京・平安京に移った後も、「東大寺七郷」の1つ「今小路郷」として記録にあらわれています。奈良観光で麗わっていた江戸時代には、街道沿いの今小路町には多くの旅籠屋が建ち並んでいたと記録されています。

発掘調査でわかったこと 調査地は、今小路町の中央の通りの西に面した宅地部分、つまり平城京内にあたります。調査の結果、奈良時代から江戸時代までの各時代の遺構と遺物が見つかり、今小路町の歴史の一端が明らかになりました。以下に見つかった遺構を年代順に見てみましょう。

奈良時代 掘立柱建物2棟、井戸1基、土器埋納土坑1基、溝1条があります。建物は、中小規

模のものと考えられ、井戸からは奈良時代中頃の土器が出土しました。

平安時代 井戸3基のほか、多数の土坑と柱穴が見つかりました。井戸は、平安時代中頃（10世紀前半）と後半（11世紀末～12世紀）のものがあります。この井戸の1つから後述する唐草双鳥紋六稜鏡と呼ばれる鏡が出土しています。井戸は径約1.0mの平面円形で、底近くでは隅丸方形になります。深さは約1.6mで、枠は見つかりませんでした。鏡の出土状況は不明ですが、土器や瓦とともに井戸の埋土から出土しました。出土した土器から、11世紀末に埋められたことがわかります。

鎌倉時代 井戸1基と多数の土坑と柱穴が見つかりました。目を引くのが、東西約9.0m、南北約6.4mの平面方形の大きな土坑です。中には何百枚もの上部器皿が捨てられ、その多くは割れずにそのまま出土しています。このような土坑は、奈良町遺跡内でしばしば発見されています。これらの土器は、神前での宴会に用いられた食器と考えられています。このような宴会をとおして、当時の人々は「郷」内の結束をかためていたようです。

室町時代 上坑と柱穴のほか、土器の跡が見つかりました。蔵の中には、常滑焼と備前焼の大甕が半ばまで埋め込まれて、整然と並んでいたようですが、6個を残して他は持ち去られていました。復元すると、2棟以上の蔵に37個以上の甕があったようです。1つの甕は、径約80～90cmと一抱えもあり、200～300㍑ほどの容量があると推定できます。全部の甕が使われたとすると7,000～10,000㍑つまり約10トンの液体が貯蔵できることになります。残念ながら、液体の種類は不明です。

江戸時代 井戸、土坑のほか、石組土坑、石組溝が見つかりました。この時代の今小路町は大きな火災にしばしば見舞われます。調査でも火災を示す焼けた瓦や土が見つかっており、災害を何度もくり抜けてきた今小路町の人々の姿が、偲ばれます。

唐草双鳥紋六稜鏡 鏡は、ほぼ完全な状態で出土しました。直径は9.5cmで、重さは85gあります。後がある円弧6個を連ねた花形の外形で、六稜鏡といいます。平安時代の鏡の多くは八稜鏡で、六稜鏡は少ないものです。

鏡背（紋様のある面）に対してものを映す面は鏡面の紋様は、圓線で内区と外区とに分かれています。内区には、中央の鉢（鉢座）を中心に、鳥と唐草紋を各2個ずつ対称に配置しています。鳥は両方の羽を上に広げ、2本の足は地を蹴っているようです。長い尾も見られますが、鋲上がりが悪く、顔や羽毛の表現が潰れてはっきりしない部分があります。また、外区には、雲のような紋様6個を連ねますが、これも鋲上がりが悪く判然としません。

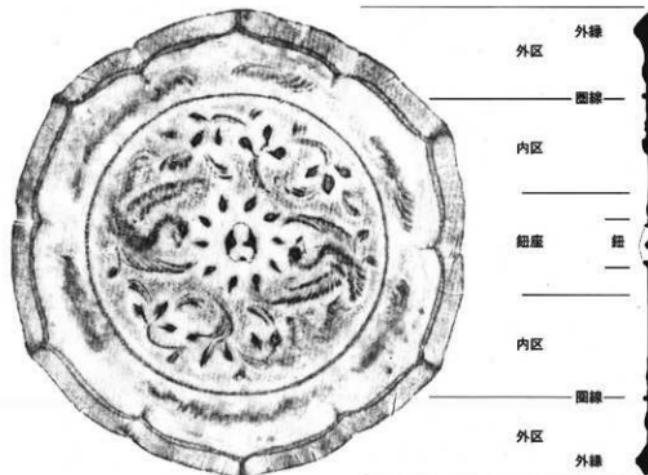
鏡の鑄造 これら鏡背の紋様が鮮明でないことは、当時の鏡製作技術が大きく関わっています。

当時の鏡は、鑄造と呼ぶ技術で作られます。鑄造とは簡単に言うと、鏡の型（鋳型）を作り、それに溶かした金属を流し込んで製品を作る方法です。この鋳型の作り方が時代によって変わることが、これまでの研究で明らかになっています。

今回出土した鏡は「踏返鑄造」と呼ばれる方法で作られています。鏡そのものを、生乾きの粘土に押付け、その紋様を写し取って鋳型を作る方法です。この方法の利点は、一枚の鏡から簡単に同じ複数の鋳型が作れ、同じ物が大量に複製できることです。また複製した鏡からさらに鋳型を作り、複製の複製も作れます。しかし一方で、元となった鏡より紋様の細部が純くなり、大きさもやや小さくなる欠点があります。今回の鏡も複製に複製を重ねた結果、紋様の鋲上がりが悪くなつたものと考えられます。

このような作り方から脱却して、新たな作り方が、平安時代中頃に発明されます。生乾きの粘土に直接紋様を彫込んで鋳型を作る方法で、彫の深い繊細な紋様を作り出すことができます。しかし、鋳型から鏡を取り出す時に鋳型は壊れるので、この方法では同じ紋様の鏡は一枚しか作ることができません。以後、江戸時代に踏返鑄造が復活するまでこの方法で鏡が作られます。いわゆる「和鏡」です。

今回出土した鏡は、古代の唐式鏡から中・近世の和鏡へとつながる形態をもつものです。



唐草双鳥紋六稜鏡折影・断面図（原寸大）

おうけつば かいそうじんこつ 古墳時代末期の横穴墓から改葬人骨

歌姫赤井谷横穴墓群 奈良市歌姫町

歌姫赤井谷横穴墓群の発見 歌姫赤井谷横穴墓群は、奈良市歌姫町から山陵町にかけて東西にのびる奈良山丘陵（佐紀丘陵）南端部に位置しています。

この横穴墓群は、昭和29年に土地所有者の方が現地の土を採取していた際に偶然発見されたもので、通報を受けた奈良県教育委員会が発掘調査を行っています（1号横穴墓）。今回調査した横穴墓は、平成15年に土地所有者の方が1号横穴墓の西隣で陥没した穴を発見したのを契機に、市文化財課と県文化財保存課が現地で横穴墓であることを確認しました（3号横穴墓）。

3号横穴墓の調査 調査は、平成15年度からはじめ、15年度は周辺の地形測量を、16年度は3号横穴墓の規模を知るための発掘調査を行いました。17年度は奈良大学考古学研究室と合同で横穴墓の詳細を知るための発掘調査を行いました。

3号横穴墓は、全長約10mで、遺体を埋葬する玄室と、玄室に至る通路の羨道とに分かれます。

玄室の形態は、幅約2m、長さ約3mの平面長方形です。天井は、崩落しているため、正確な高さはわかりませんが、約1.7mのかまぼこ形の天井と推測されます。

羨道は、長さが6.8mで、埋まった土の層を観察すると、人為的に2度閉塞した様子がうかがえます。いったん閉じた後に、また開いて追葬を行ったと考えられます。

1号横穴墓には陶棺が2基置かれていましたが、3号横穴墓には、床面に人骨だけがあり、棺はありませんでした。

人骨は、玄室の床面の3か所に置かれていました。それぞれ、数体分の人骨があり、全部で5体以上が埋葬されているようです。また、この3か所とは離れた位置からも人骨が出土しており、追葬されたものと考えられます。

副葬品には、須恵器の蓋や提瓶、土師器の壺、耳環（2点）、刀子があり、土器の形状や大きさ等から6世紀末から7世紀初頭のものと考えられます。



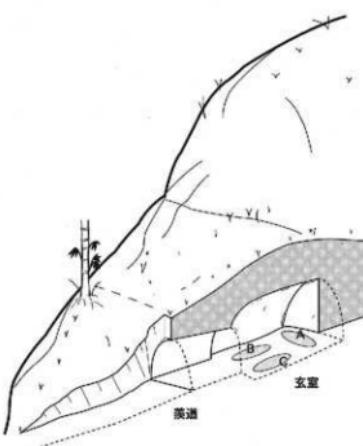
調査位置図 (1/25,000)

3号横穴墓の改葬人骨 3号横穴墓では、人骨が床面の3か所（A・B・C群）に置かれています。これらの人骨については今後詳しく調べないといけませんが、A群には2体分の、C群には少なくとも2~3体分の人骨があり、B群もあわせると、少なくとも5体以上が埋葬されているようです。また、足の骨、腕の骨、背骨や、歯などがあり、骨の長さや歯の磨耗度からみると、埋葬された者の中には子供もいるようです。

B群についてはよく分りませんが、A群とC群は、それぞれ本来つながっているべき骨がつながっていない状態でおかれている（交通状態がない）ことや、数体分の骨が混在していることから、初めから3号横穴墓に遺体を埋葬したのではなく、どこかにいったん葬られて骨の状態になってから改めてこの3号横穴墓に埋葬されたもの（改葬）と考えられます。

奈良県内では、歌姫赤井谷横穴墓群のほかにもいくつかの横穴墓群がみつかっていますが、改葬された例はなく、今回が初めての例です。

改葬が明らかとなっている横穴墓群としては、京都府八幡市・荒坂横穴墓群があります。この横穴墓群で改葬された事例では、出土した人骨の各部位の位置が本来あるべき位置にないところから、遺体をそのまま改葬したとは考えがたく、横穴墓の外で遺体を骨化させた後、改葬した可能性が高いと考えられています。また、改葬する際、概ね全身の各骨が集められており、骨の選別はさ



歌姫赤井谷3号横穴墓の模式図
(A・B・Cは出土した人骨の位置)

れていないようです。ただし、改葬する際にして、脛骨などの細かな骨を省き、頭蓋骨や骨盤、腕、足の骨を選別している遺跡の例もあるようです。

歌姫赤井谷3号横穴墓で認められた改葬については、どこで骨化されたのか、骨の選別はあったのか等の問題については、現在のところわかりませんが、今後、人骨に残されたデータ（どの部分の骨が残っているのかや性別、年齢、死因等）の調査を詳しく行い、上述の問題や被葬者像に追っていくことができればと考えています。

改葬とは、「いったん埋葬した遺骸を後日とりだし、あたらしい墓所に埋葬すること」（小林行雄・水野清一編『考古学辞典』）です。

改葬の事例は縄文時代からあり、愛知県吉胡貝塚では、数体分の足や腕の骨を方形に揃えて並べた内側に頭蓋骨や肋骨などをつめた例がみつかっています。

また、文献では、6世紀の終わりから7世紀の初め頃に天皇の改葬の記事が多くみられます。「日本書紀」には、587年に崩御し、磐余池上陵に葬られた用明天皇が、593年河内磯長陵に改葬された記事があります。また、推古天皇は、最初竹田



吉胡貝塚出土の改葬人骨

皇子の陵に葬られましたが、後に河内の料長に改葬されています。ただし、7世紀頃の群衆墓でも改葬の例はみつかっており、天皇など特別な人々だけに行われた埋葬方法ではないようです。

奈良市埋蔵文化財発掘調査の歩み II
－速報展示リーフレット集－
(平成15～17年度)

平成19（2007）年3月27日発行

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター
(奈良市大安寺西二丁目281番地)
TEL 0742-33-1821

発行 奈良市教育委員会
(奈良市二条大路南一丁目1番1号)
TEL 0742-34-1111 (代表)

印刷 株式会社 明新社
(奈良市南京終町三丁目464番地)